

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2013

課題番号：22520392

研究課題名(和文) 複文構造の認知モデル研究：構文カテゴリの精緻化に向けて

研究課題名(英文) A study on the cognitive models of complex constructions: toward a multi-dimensional characterization of constructional categories

研究代表者

大堀 壽夫 (Ohori, Toshio)

東京大学・総合文化研究科・教授

研究者番号：20176994

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円、(間接経費) 900,000円

研究成果の概要(和文)：本プロジェクトでは、複文構造について認知・機能言語学的枠組みによって研究を行った。理論面では、等位接続-従位接続という二分法を批判的に検討し、より経験的に妥当なモデルを節の統合性という概念を軸に提案した。南不二男による複文の階層モデルを、より体系的にRole and Reference Grammarの接続理論によって再解釈した。データに即した個別研究としては、(i) 中断節(またはinsubordination) 構文の文法化の経路に着目した研究；(ii) 談話の相互行為の観点から見た、理由表現の研究；(iii) プロジェクトの理論的基盤としての認知意味論研究を行った。

研究成果の概要(英文)：An in-depth research on complex constructions was conducted, mainly adopting a cognitive-functional framework. On the theoretical side, the traditional coordination-subordination dichotomy was critically examined and a more ramified and empirically viable model centering around the notion of clause integration was proposed. Fujio Minami's pioneering model of the hierarchical organization of complex constructions was reinterpreted in a more systematic fashion within the Role and Reference Grammar theory of clause linkage. At the same time, several data-oriented specific studies were carried out: (i) study of suspended clauses (aka insubordination), focusing on their grammaticalization paths; (ii) examination of reason expressions from a discourse-interactionist perspective; and (iii) studies in some key issues of cognitive semantics as an indispensable ground work for the project.

研究分野：言語学(意味論、機能的類型論、複文構造の類型と文法化、談話分析)

科研費の分科・細目：言語学、言語学

キーワード：複文 認知言語学 節の統合性 意味類型 構文理論

1. 研究開始当初の背景

(1) 節を結合してより大きな談話単位を形成するための手段は多様であり、従来の文法研究でとられてきた等位接続-従位接続といった単純な二分法では捉えることができない。また、複文を構成する節の間の意味関係についても、直観に基づいた分類にとどまり、構造的な側面との関係性については探究の余地が多く残されている。

(2) コーパスを利用した言語研究は急速な進展をとげている。語の生起頻度や共起関係の調査だけでなく、談話の文脈の中において接続形式がどのような使われ、相互行為に寄与しているかはまだ十分に研究されていない。いわゆる「言いさし(中断節)」構文はその一例である。

2. 研究の目的

(1) 複文構造の類型についての諸研究を検討し、問題点を明らかにすると同時に、より妥当性の高い枠組みを構築する。主として Role and Reference Grammar (RRG) の観点に立ちつつ、個々の構文についての的確な特徴づけができるように、より精細なカテゴリーの規定を試みる。

(2) 理論的研究を検証するために、具体的な構文研究を行う。

(2a) 中断節構文の類型論: いわゆる「言いさし」構文は日本語において顕著に見られる。このような現象は通言語的にも見られることが明らかになっている。本研究では、いかなる意味タイプを表わす形式が、いかなる談話機能を伴って「言いさし」化するかについて研究する。

(2b) 主節と従属節の意味関係: 副詞節の表わす意味関係は多様である。本研究では特に理由の關係に着目し、主節と従属節の相対順序、および表わされる意味のレベル(論理的、認知的、語用論的、相互行為的)について分析を行う。

3. 研究の方法

本研究では接続タイプ規定のための理論的枠組みの検討と構文研究を相互に関連づけて行う。日本語と英語の分析に関してはコーパスデータ(既存の公開されたものに加え、研究代表者が収集した会話データも用いる)を用い、これに加えて諸言語の記述文法からの情報と専門的知識の提供を通じて、一般性のある研究基盤を構築する。理論的枠組みと

しては認知・機能言語学に準拠しつつ、談話機能についての最新の知見も導入する。研究の進行状況および成果は国際学会等での発表やワークショップ等を通じて積極的に発進する。また、認知・機能言語学の基礎研究の一環として、広く認知と言語の関係についての知見も摂取する。

4. 研究成果

(1) 複文構造の類型については、南不二男のモデルを RRG の接続理論と比較検討し、より一般的な枠組みを提示した。南モデル自体は、文の述語形式に注目し、語幹から完成された文までの接尾辞による拡張段階を多くの統語テストによって A-D 類へと分類したもののだが、これを接続の類型として見た場合、各カテゴリーの構造的基盤については十分な整備がなされていない。これに対し、本研究では RRG における内核、中核、節という節の層状構造、および依存関係の類型に基づいて、南の提案した A-D 類を整備した。同時に、多くの文法現象が接続類型からの論理的帰結として説明できることを示した。

(2) 中断節構文については、第一に文法化プロセスの中に位置づけ、各種の複文構造の歴史的発達経路と検討し、それらがどのように中断節となっていくかを跡づけた。日本語においては、ソースとなる構文を異にする何種類かの中断節が存在し、それぞれ構文としての固定の度合いが違うことを示した。特に、「～から」で終わる中断節について、そこで伝えられる理由のタイプを考察し、相互行為的なレベルでの意味が重要であることを示した。理由-帰結として想定される文脈は単一の文にとどまらないので、帰結部分が直接隣接する節でない場合、特に中断節が生じやすい。

(3) 中断節構文は、文法化理論の文脈で見ると、複文構造の変化の終着点と見ることができ。このような変化は多くの言語で見られ、そして多様な従属節が中断節へと変化することが明らかになった。近年、言語能力を生物学的・進化論的な観点から見る議論が盛んであり、その中で従属節を含む統語的な再帰的埋め込み操作こそが、人間言語の最重要な特性であるという主張がなされている。しかしながら、中断節構文の存在は従属節という構造がこれまで思われてきたよりも遥かに歴史的に不安定であることを示している。同時に、従属節はほとんどの場合、その文法化

の起源が歴史的時間のスパンで追跡可能である。結果、再帰的な埋め込みという操作は認知能力としては認められるが、従属節の存在をその論拠として考える根拠は弱いということを示した。

(4) 理由の関係を表わす接続について、特に英語の談話に基づいて相互行為の観点から分析を行った。that's why という表現は理由を表わすものであるが、理由の関係づけは隣接した二つの節が表わす命題間において成り立つものというより、談話のより広い文脈を結びつけつつ、発話者が行い理由づけという行為の妥当性を再確認する、あるいは確認済みのものとして提示する機能があることを示した。このような機能は、同時にコーパス調査から分かる語結合上の特徴(主語の選択、助動詞の有無、否定の有無、使用される動詞の意味タイプ)にも反映されている。

(5) 研究のバックグラウンドとしての認知言語学研究を行い、その重要な基礎部分をなすメタファー理論および類像性理論について考察を進め発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

Toshio Ohori & Shen Bo. Metaphor as two-way synecdoche: a critical assessment. *JELS* 30 (Papers from the Thirtieth Conference of & the Fifth International Spring Forum of the English Linguistics Society of Japan). 査読有. 2013. 320-326.

大堀壽夫. 文の階層性と接続構造の理論. 『*國語と國文學*』11月号. 査読有. 2012. 42-52. 東京大学国語国文学会.

大堀壽夫. 談話と認知からみた「理由」: 対照分析に向けて. 『*中国語学*』258. 査読有. 2011. 65-83.

大堀壽夫. 認知意味論--カテゴリー化とメタファー. 『*日本語学*』臨時増刊号(30-14): 特集・言語研究の新たな展開. 査読無. 2011. 59-67. 明治書院.

大堀壽夫. 『主語』を問い直す. 『*人間文化* 特集・ことばの類型と多様性』13. 人間文化研究機構. 査読無. 2011. 17-26.

[学会発表](計11件)

Toshio Ohori. Insubordination in Japanese: implications for grammatical theory and language evolution. 2014年2月27日. Seminar für allgemeine Sprachwissenschaft, Heinrich Heine Universität, Duesseldorf. 招待講演.

Toshio Ohori. Rethinking iconicity from an evolutionary perspective. The Ninth International Symposium on Iconicity in Language and Literature. 2013年5月5日. 立教大学. 招待講演.

大堀壽夫. 従属句の類型を再考する. 国立国語研究所シンポジウム. 複文構文の意味の研究. 2012年12月15日. 国立国語研究所. 招待講演.

Toshio Ohori. Toward a taxonomy of insubordination: grammaticalization paths and discourse motivations. Dynamics of Insubordination Symposium. 2012年10月27日. 東京外国語大学 AA 研. 招待講演.

大堀壽夫. 認知類型と心理述語. 日本言語学会第144回大会シンポジウム. 知覚・感覚・感情をめぐる言語表現. 2012年6月17日. 東京外国語大学. 招待講演.

Toshio Ohori & Shen Bo. Metaphor as two-way synecdoche: a critical assessment. The 4th International Spring Forum of the Japan English Linguistic Society. Konan University. 2012年4月22日.

Toshio Ohori. Reexamining syntactic recursion: evidence from discourse interaction. Friedrich Schiller Universität Jena. 2012年3月21日. イエナ大学. 招待講演.

Toshio Ohori. When recursion collapses: evidence from discourse interaction. *Evolang* 9. 2012年3月16日. Kyoto.

大堀壽夫. 大堀壽夫・林冠吟. 会話における情動的ピーク検出についての予備的報告. ワークショップ話し言葉の言語学 3. 2012年1月7日. 慶應義塾大学(日吉キャンパス)

大堀壽夫. 中断節の機能と言語進化. 名古屋大学大学院国際言語文化研究科. 応用言語学講座第6回公開講演会. 2011年10月4日. 招待講演.

大堀壽夫. 「主語」を問い直す. 人間文化研究機構第14回公開講演会・シンポジウム. ことばの類型と多様性. 2011年2月19日. 有楽町朝日ホール. 招待講演.

〔図書〕(計6件)

大堀壽夫. 従属節の階層を再考する: 南モデルの理論的基盤. 益岡隆志, 大島資生, 橋本修, 堀江薫, 前田直子, 丸山岳彦 (eds.) 『日本語複文構文の研究』. ひつじ書房. 2014. 645-672.

大堀壽夫. That's why の談話機能. 秋元実治・前田満 (ed.) 『構文化と文法化』. ひつじ書房. 2013. 73-95.

大堀壽夫・遠藤智子. 構文的意味とは何か. 澤田治美 (ed.) 『構文と意味』. ひつじ現代の意味論講座 2. ひつじ書房. 2012. 31-48.

Toshio Ohori. When recursion collapses: evidence from discourse interaction. Thomas C. Scott-Phillips, Mónica Tamariz, Erica A. Cartmill, James R. Hurford (eds.) *The Evolution of Language. Proceedings of the 9th International Conference (EVOLANG 9)*. Singapore: World Scientific. 2012. 282-287.

Toshio Ohori and Heiko Narrog. Grammaticalization in Japanese. Heiko Narrog & Bernd Heine (eds.) *The Oxford Handbook of Grammaticalization*. Oxford: Oxford University Press. 2011. 775-785.

Toshio Ohori. Grammaticalization of subordination. Heiko Narrog & Bernd Heine (eds.) *The Oxford Handbook of Grammaticalization*. Oxford: Oxford University Press. 2011. 636-645.

〔産業財産権〕

出願状況 (計 0件)

取得状況 (計 0件)

〔その他〕

報告書

大堀壽夫・秋田喜美・古賀裕章・山泉実・幸松英恵. 「買う」, 「売る」, 「貸す」項目執筆. プラシャント・パルデシ (編) 『日本語学習者用基本動詞用法ハンドブックの作成』. 国立国語研究所. 2013.

書評・紹介

大堀壽夫. 新刊紹介・小野寺典子他 (編) 『歴史語用論入門』. 青山学報 239 (Spring 2012). 2012. 34.

大堀壽夫. 認知・機能言語学: その多元性と共通テーマ. マイケル・トマセロ (編) 『認知・機能言語学』 訳者解説. 研究社. 2011. 393-397.

翻訳

大堀壽夫, 秋田喜美, 古賀裕章, 山泉実共訳. マイケル・トマセロ (編) 『認知・機能言語学: 言語構造への10のアプローチ』. 2011. 研究社.

ディスカッサント、企画、司会

Toshio Ohori. 日本英語学会特別ワークショップ Typology of event semantics and argument encoding. 企画・司会. 2012年1月11日. 慶應義塾大学.

大堀壽夫. 日本女子大学学術交流研究シンポジウム「コミュニケーションのダイナミズムと社会形成 -自然発話データから-」ディスカッサント. 2011年10月15日. 日本女子大学

大堀壽夫. 文を超えたコーパス研究: 「定量」的な分析から「文脈」重視の分析へ. 英語コーパス学会 東支部主催シンポジウム. ディスカッサント. 2011年7月9日. 慶應義塾大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者 大堀 壽夫

(OHORI, Toshio)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号: 20176994